ACT!

MEDECINS SANS FRONTIERES
国境なき医師団

1999年
ノーベル平和賞受賞

支援者さまと国境なき医師団（MSF）をつなぐニュースレター　2026年2月号

患者さんの一番近くに、いつも。

「現地スタッフ」がいるから

国境なき医師団（MSF）の
スタッフの約８割は、
MSFの活動地域で
生まれ育った
「現地スタッフ」。
患者さんたちに
近い立場や目線から
現地のニーズに寄り添って
活動を推進する、
かけがえのない存在です。

© Ante Bussmann/MSF

© Yuliia Trofimova/MSF

アイシャ・B
健康教育担当（チャド）

スーダン・西ダルフール州出身。紛争が激化した故郷を離れ、家族と共に隣国チャドへ。現在はMSFの診療所で健康教育や通訳などの業務に奔走する。難民の一人として喪失の痛みを抱える彼女が、いまの仕事に見出したのは──。

© Ante Bussmann/MSF

チャドの一時滞在キャンプで、スーダンからの難民に栄養失調について説明するアイシャ（右）。

ハサン・エル・カファルナ
外科医（ウクライナ）

ウクライナとパレスチナをルーツに持ち、２つの戦争に翻弄されてきたハサン。ウクライナで紛争が激化する前は首都キーウの救急病院で働いていたという彼は、今日もMSFの外科医として最前線でメスを握る。そんな彼の胸中とは？

© Linda Nyholm/MSF

ハサンの仕事場の一つは、薬局を改装した急ごしらえの手術室。時折、砲撃の音が聞こえる。

故郷を遠く離れた不安や心身の苦痛に同じ立場で向き合う

私たち難民は、大きな家族のように支え合っているのです

アイシャ・B
健康教育担当
（チャド）
© Ante Bussmann/MSF

スーダンでは社会学と都市開発を学んだ後、NGOで働き、幸せに暮らしていました。ところが、戦争が全てを変えてしまいました。

2023年４月、私は兄と母と共に、猛烈な暑さと襲撃という恐怖に耐えながら、徒歩で国境を越えました。スーダンからチャドへ逃げる途中、村々が焼け落ちるのを目撃しました。武装した男たちから身を隠し、無数の検問所を通過する旅はまるで悪夢。チャド東部アドレの一時滞在キャンプにたどり着いた時には、私たちはほとんど全てを失っていました。

仕事は家族を支える収入源、そして大切な生きがい

私はいま、アドレのキャンプに国境なき医師団（MSF）が開設した診療所で働いています。スーダンにいた頃、チャドに住む叔父をよく訪ねていたので、チャドの言語や文化には親しんでいました。まずはボランティアでMSFの活動に参加し、やがてスタッフとして勤務するようになりました。

いまでもスーダンの状況は深刻です。故郷からのニュースを耳にするたび、現地に残る友人や親戚を思うと、胸が張り裂けそうになります。しかし、ここで仕事に集中する以外に選択肢はありません。

日々の業務は気を紛らわせ、生きがいを与えてくれます。この仕事は家族を支える収入源であると同時に、他者を助ける機会でもあります。人びとを支えるために懸命に働く素晴らしいチームの一員でいられて幸運です。いまは私たちにとって困難な時代ですが、互いに助け合うことで多くの事を成し遂げられると信じています。

© Ante Bussmann/MSF
同僚の衛生士と共に、入院中の赤ちゃんの世話をするアイシャ（右）。

いち早く駆け付け、最後まで人びとに寄り添う

政情が不安定な国や地域では、時に国際スタッフが入国しにくい場合も。そんなときは、その地域で暮らす現地スタッフが助けを求める人びとのもとへいち早く駆け付け、必要な支援に取り組みます。国際スタッフが国外に退去せざるを得ないときも、彼らは最後まで人びとに寄り添います。

MSFとの出会いは幼き日のガザ。いまは自ら最前線の病院へ

攻撃の不安を振り払い、私は医療に専念するのみです

ハサン・エル・カファルナ
外科医（ウクライナ）
© MSF

パレスチナ人とウクライナ人を両親に持つ私は、ウクライナの首都キーウで生まれ、パレスチナ・ガザ地区で育ちました。ガザではイスラエル軍の侵攻で自宅が破壊され、多くの知人を失いました。子どもの頃からMSFの車両を見ていましたし、人びとに医療を提供する医師たちであることもわかっていました。

私が働く病院は、ロシアによるウクライナ侵攻の最前線にあり、毎日のように砲撃の音や爆発音が聞こえます。

© Linda Nyholm/MSF
手術中のハサン（右）。突発的な停電に備え、常にヘッドランプを装着している。

キーウの救急病院に勤務していた時は、一般的な外科を担当していましたが、MSFに参加してからは、爆発による負傷や整形外科的損傷、開放性損傷など、あらゆる患者さんを診るようになりました。外科医不足で次から次へと複雑な手術を担当するうちに、短期間で成長できたと思います。

患者さんの笑顔と回復が最高の励みに

ある時、何かの破片が右胸を貫通し、大きな傷を負った50代の女性が搬送されてきました。正直、手術を乗り切れるか不安でしたが、治療を諦めるわけにはいきません。チームで力を尽くした結果、彼女は徐々に回復し、１カ月後、笑顔で病院を後にしました。患者さんが回復し、健康を取り戻していく場面に立ち会えることは、医師として最高の励みになります。

戦争中は、病院ですら、いつ攻撃されるかわかりません。しかし、そんな不安は振り払い、日々、目の前の仕事と向き合います。MSFの安全管理担当者を信頼して、私は医療という自分の職務に専念するのみです。

現地スタッフのチカラ 1

文化から治安情報まで頼れる地域の専門家

現地スタッフは、活動現場の人びとと国際スタッフとの懸け橋のような存在です。通訳や運転手、警備員など地域の言葉や社会・文化に詳しい彼らが間に立つことで、スムーズなコミュニケーションが可能に。また、情勢が不安定な国や地域では、地元の治安情報の収集にも貢献しています。

インド事務所の運転手、ムハンマド。山岳地帯を走る前に、念入りに車を点検する。

現地スタッフのチカラ 2

MSFで得た収入で、家族の暮らしを支える

紛争地や失業率が高い地域には、大家族を養う現地スタッフも。南スーダン事務所で倉庫管理者を務めるスーザンもその一人です。「難民だった私が大学に行けたのは、亡き兄が懸命に働いて学費を工面してくれたから。いまは兄の子どもたちが望む教育を受けられるように、私が支援しています」

「薬や衛生用品を運ぶ物流は、人びとの人生を変える仕事」と話すスーザン。
© Cindy Gonzalez/MSF

現地スタッフのチカラ 3

「元患者」から、いまは患者さんを支える側に

現地スタッフには患者経験者もいます。子どもの頃にMSFで治療を受けた経験から医療従事者を目指したという人もいれば、病気を克服して社会復帰を果たした人も。ナイジェリアでMSFが支援するソコト水がん病院の清掃担当、ダヒルは元水がん患者。入院中の患者さんに希望をもたらす存在です。

© Fabrice Caterini/Inediz
いまは結婚して子どももいるダヒル。「自分が誰かを助ける側に回るなんて」と話す。

心に残る 現地スタッフとの出会い

日本から派遣されたスタッフたちが各国で出会った
思い出深い現地スタッフをご紹介します。
共に過ごした時間や交わした言葉には
いまも忘れられない温かさが残っています。

タンザニアで出会った ロジスティシャンのバルテルミー

>> 愛川琢也（ロジスティシャン）

タンザニアの難民キャンプを支援するチームで、物資調達チームのリーダーとして物資の発注や在庫管理を担当していたブルンジ人のバルテルミー。ある日、普段はTシャツ姿の彼がスーツで出勤してきました。理由を尋ねると、「今日は難民になって８年の記念日なんだ」と笑顔で答えたのです。あまりに長い年月に言葉を失いましたが、彼はいつも明るく前向きに働き、どんな困難にも諦めない強さを持っていました。そんな彼と働けたことが誇りです。

© MSF

ナイジェリアで出会った 運転手のアイザック

>> 園田亜矢（ヘルスプロモーター）

隣州で鉛中毒症状の疑いが報告され、一刻も早く状況の確認が必要になりました。視察先の村に行くには川を渡らねばならず、雨季の始まりで川は増水中。車が押し流される危険があり、一旦は断念。翌日、車窓にまで水が迫る状況で渡ったり、ぬかるみにはまった仲間の車を引っ張り上げたりしながら、なんとか村へたどり着きました。これができるのは運転手の高い技量があるからこそ。MSFの運転手の判断力や技術はまさにプロで、いつも頼れる存在です。

© MSF

マレーシアで出会った 地域支援担当のヌール

>> 今津みなみ（日本事務局広報部員）

MSFが支援する診療所で出会ったのは、ロヒンギャのボランティアスタッフ、ヌール。５歳でミャンマーを離れ、小さなボートで海を漂流し、マレーシアにたどり着いた彼女は、正規の教育を受けられなかったものの、独学で英語を学び、「自分の人生の旅が学位」と語っていました。いまは女性や子どもなど弱い立場の人びとの医療支援に携わっています。「この活動が翼をくれた」と話す彼女。困難の中で前を向き、自分らしく生きる姿が心に残りました。

© MSF

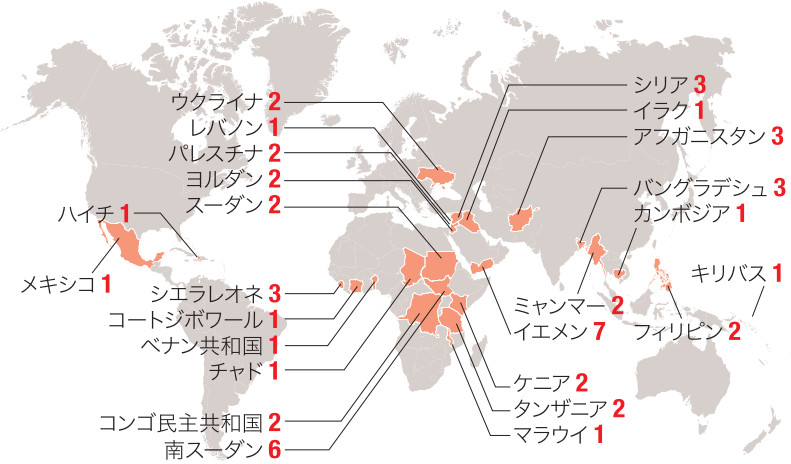
© Ayano Kinoshita

今号の感想を教えてください

今号の内容はいかがでしたか？
ぜひアンケートで皆さまの感想を聞かせてください。
締め切りは2026年３月31日（火）です。

スマートフォンから

日本からのスタッフ派遣状況
25の国と地域53人（2025年12月１日現在）



MSF連絡帳

領収書のお届けについて

2025年に入金いただいたご寄付の領収書の発送は、本年1月末までに終了いたしました。ご不明点などは、**0120-999-199**までお問い合わせください。例年、この時期は電話が大変混み合います。早めにご連絡をいただけますようお願いいたします。

確定申告について

MSF日本への寄付は税制優遇措置（寄付金控除）の対象となります。当団体の領収書を添付の上、認定NPO法人に対する寄付として確定申告を行うことで、税金が還付されます。詳しくは、国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。

© Ayano Kinoshita

ニュースレター ACT! 2026年2月号
発行元　特定非営利活動法人　国境なき医師団日本
〒162-0045　東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST 3 階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料
平日 9:00～18:00　土日祝日・年末年始休業
※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。
※2025年12月の情報を基にしています。
最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。

マイページはこちらから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL **03-5286-6430** 担当者直通
平日10:00～17:00／担当：荻野、今尾、小芝

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp

LOY2601